

アンブロワーズ・パレと外科療法

—栄養療法の知的枠組みについての研究 2—

藤井義博

藤女子大学 人間生活学部 食物栄養学科
人間生活学研究科 食物栄養学専攻

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the characteristics of the surgery of Ambroise Paré. Ambroise Paré, the originator of modern surgery, was also a Renaissance humanist with compassionate and observational mind, who lived in 16th century France previous to the establishment of medical and dietetic science. In comparison with modern scientific medicine and surgery, several characteristics were found in his surgery: First, his surgery was a therapeutics complemented with regimen, a good way of living, and pharmacotherapy; Secondly, one person's constitution had a more important role on the treatment of patients than diseases themselves; Thirdly, his therapeutics was a learned art for recovering the wholeness by complementing the body's natural healing power with regimen or a good way of living. Therapeutic viewpoint of Ambroise Paré would be important for the establishment of modern regimen, diet or good way of living.

1. はじめに

1-1 アートとしての栄養学

患者中心の医療とケアを目指す上で、現代の医療とケアの枠組みは、根本的な不都合を内在させていると考えられる。しかもその原因は、逆説的なことに思えるかもしれないが、現代の医科学が科学という普遍性に根ざした学問であることにある。¹⁾ 同様に現代の栄養学 (Dietetics) は、個人的な差異よりもむしろ普遍性に根ざした科学によって特徴づけられており、その実践は一般的規則の上に構築されている。栄養学がこのようにユニバーサルなアドバイスをするようになったのは、17 世紀後半以降のことであることが指摘されている。²⁾ すなわちそれ以前の栄養学は、個人的アドバイスの栄養学であり、個人主義的な生活療法という獲得的なアートであった。

1-2 今、なぜアンブロワーズ・パレか？

科学としての医学および栄養学が成立する前夜であった 16 世紀西欧の医療の在り方すなわち個人主義的な生活療法という獲得的なアートであったと想定されるアンブロワーズ・パレの外科学の特徴をマルゲーニュ版パレ全集 (以下、全集と記す)³⁾ におい

て検証することが本研究の目的である。具体的な目的は以下の 3 つである。まず第一に、ミッシェル・フーコーが指摘したように⁴⁾、病理解剖に基づいた近代医科学が近代の個人の成立に決定的な影響を与えたならば、その成立以前の医学における個人すなわちアンブロワーズ・パレにおける個人の特徴について検討する。次に、現代の西洋医学の中では (まだ) 周辺的な扱いをうけている個別に特異的な生活療法のアートすなわち終末期ケアもできるあるいは病いに意味を見出すことができるようなアートは、アンブロワーズ・パレの医学においてはどのような姿をしていたのかを検証する。第三番目に、現代の西洋医学の特徴をなす薬の発展は、病気の病理学的理解に基づいていることを仮定するならば、アンブロワーズ・パレにおける薬と食物との関係はどのようなものであったのか、これを検証する。

2 アンブロワーズ・パレの歴史的位置づけ

2-1 アンブロワーズ・パレについての従来の評価

アンブロワーズ・パレ Ambroise Paré (1509-1590) は「近代外科学の父」と呼ばれるように実証的な外

科学の実践者であると共に深い人類愛を持ったヒューマニストでもあった。彼が生きた16世紀のフランスは、ルネサンス期であった。ルネサンス期とは、人間の考え出した思想や制度自体がその本源の清新な精神を圧殺してしまいかねない欠陥を産み出したときに、これらの思想や制度のなかに生きる人々による対抗の結果生じた激しい変革がとくに生々しい形で見られた時代ととらえることができる。⁵⁾ とくに変革者側から見ると、つまり科学的発展史から見ると、16世紀は17世紀の科学の世紀の前夜であり、科学の萌芽はあっても、まだまだ創造の教義とアリストテレスの4元素説の枠組みが学問を支配していた時代であった。16世紀の医学は、方法論においては1637年のデカルトの方法序説の発表の前夜にあって、まだ解剖学と古代医療理論のはざまにて右往左往している状態にあり、当時の人々にとって医師は、聖人、魔法使いとの区別が十分にしている存在ではなかった。⁶⁾

アンブロワーズ・パレの人間愛に支えられた実証精神は高く評価されている。⁵⁾ パレは、戦争から外科の実践を実証的に学んだが、技術以外の領域では古代理論の研究も重要であったことが指摘されている。⁶⁾ またパレは、中世医学書の伝統を継承した当時の医学文献が王の奇跡に言及するのが普通だったという当時の通例に反して、「外科学総論」中の「瘰癧」の章で、王の病の奇跡療法への言及を避けたことにおける実証性が評価されている⁷⁾。しかしながら、他方では、「ルネッサンスの最盛期においては、もっとも大胆で、もっとも強靱な頭脳の持主でさえ、いまだ自然の秘密の前では大変臆病で、公認された権威に拠らないかぎり一步も前進できない状態にいる。」として、「偉大な医学者アンブロワーズ・パレは当時としては出色の独立精神の持主でありながらも、その著書においてガレーノス(129頃—199。ギリシャの解剖学者)を503回、ヒッポクラテス(前460頃—375頃)を426回といった具合に、301人のさまざまな権威を引き合いに出し、古典古代の著作を2274回にもわたって援用した。」と述べて、パレの限界を指摘する者もいる。⁸⁾ 同様に、「アンブロワーズ・パレや、1543年に『人体解剖学』を出版したヴェサリウスさえ、ガレーノスやヒッポクラテス、また同じくテオフラトスに培われていた。」と否定的に述べる学者もいる⁹⁾

2-2. 本研究におけるアンブロワーズ・パレの位置付け

本研究においては、アンブロワーズ・パレを西洋科学あるいは医学の発展史の中において、その限界を否定的に位置づけるつもりはない。むしろ本研究は、現代の西洋医学と栄養学が脱皮したと考えているところのルネサンス期の医療の中において、アンブロワーズ・パレという本源の清新な精神を再発見する試みである。それは、言い換えるとそれは代替医療ないしは統合医療の枠組みを見出す試みでもある。現代における漢方、鍼灸、ホメオパシー、アロマセラピー、音楽療法などの代替医療の隆盛¹⁰⁾は、市民の意識の中に生じてきた現代西洋医学とそれに基づいた現代西洋医療の枠組みの外にある医療への希求を示すものである。現代の医学や栄養学がそこから誕生してきたところのルネサンス期の医療すなわち栄養学と医学とがまだ未分離の状態にありかつ古代の医療との連続性を保持していた医療の中に、将来の医療の枠組みを見出す試みである。それはまた、「私は患者に包帯を巻く、神が彼を癒したもう。」という現代に語り継がれているパレの言葉の現代的意味を追究する試みでもある。

パレによると当時の医学は、3つの部分より成っていた。すなわち手術で病人を癒す外科療法、良い生き方(*bonne manière de vivre*)でもって病人を手助けする生活療法(*diététique*)、薬でもって病人を癒す薬物療法であった。そして、この3者は、互いに他がなくては得るべき大きなことはできないものとパレは考えていた。「この3者はいっしょに結びついているので、もし分離されてしまうと、互いに助け合わないし、外科医(*chirurgien*)も内科医(*médecin*)も薬物師(*apothicaire*)も自らの目的を達成することはできないだろう。」とパレは述べている。(全集I, pp. 22-24)このように生活療法、外科療法、薬物療法という医療の3本柱は、古代ギリシャ・ローマ以来の医療の伝統であったが、それがパレの生きた16世紀には再発見されていたことが理解される。

3. アンブロワーズ・パレとペスト

3-1. ペストとは

ペストは、ペスト菌というグラム陰性桿菌の感染を受けたネズミから吸血したノミを介してひとに伝播する細菌感染症である。ペストは、肺ペストと腺ペストとに分類される。ペストの90—95%は腺ペストであり、突然の高熱(39-41℃)と鼠径リンパ節腫脹(2—5cm)が特徴で、治療しないと死に至

る（50—90%）が、その場合最初の1週間以内のことが多い。腺ペストの5%の患者が菌血症から肺炎を起こし、ほぼ全例が死亡（1-5日以内）する。ペストは飛沫核感染を起こす。

ペスト菌による感染症は、他のどの感染症（インフルエンザを含む）とも比較にならない壊滅的な大流行の伝染病を起こしてきた。とくに14世紀の世界的大流行（ヨーロッパ、アジア、アフリカ）は黒死病として知られ、世界の人口の四分の一が失われたと推定されている（六千万人の死亡）¹¹⁾。このときのフィレンツェの惨状は、1348年に起稿され1353年に完成されたボッカッチョの「デカメロン」の冒頭に描写されている。ペスト菌による感染症は、他のどの感染症（インフルエンザを含む）とも比較にならない壊滅的な大流行の伝染病を起こしてきた。

アンブロワーズ・パレの生きた16世紀フランスにおいてもペストは大流行をしており、大きな社会問題であったことからパレの疾病観にも大きな影響を及ぼしていたと推定される。実際、パレによると、病とは「対自然の病状 (affection contre nature)」であり、それは部分の作用を即座に傷害するものであった。そして病は、「3種類、すなわち体質偏向、不良構成、連続性の断絶」に分けられていた（全集 I pp. 80-81）。さらに、「ペストは第四番目の病と言うことができよう。」とパレは述べている（全集 III p. 351）。このようにパレは、病を3種類に分類して説明したが、ペストはそれに分類できない第4番目の病と考えていた。そして「ペストについて」という24冊目の本を残している（全集 III pp. 350-464）。

3-2. アンブロワーズ・パレによるペストの定義

パレによるペストの定義は次のように記載されている。「ペストは、神の怒りに由来する、恐ろしい、嵐のような、急性の、怪物的な、恐るべき、伝染性の、凄まじい、ガレノスによって野生の獣と呼ばれた、残忍な、凶暴な、人間や獣や植物や木の生命の致命的な敵である。古代人は腐敗が空気に由来して一瞬にして同一地域において複数の命をすみやかに死滅させる時にはそれを伝染病と呼んだ。同じくある地方に固有でよく知られた病を風土病と呼んだ。」（全集 III p. 350）さらに他の箇所でもパレは、ペストという病について、「ペストとその他の危険な病は、世俗のある著者が病気には何か神聖なものがあるという告白を余儀なくされているように、大地

を支配する罪、偶像崇拜、迷信への神の怒りのしるしである。」と述べている（全集 III p. 355）。ここでは、病が神の怒りという形而上学との関連で把握されている。病は、「対自然の病状 (affection contre nature)」であるというパレの定義が示すように、あくまでも身体という自然との関連で把握されたものであり、Michel Foucault が言うように、病は自然を否定する否定形の存在以上のものではなかった。⁴⁾ すなわち、病が肯定的な実体的存在になるのは、18世紀末の病理解剖において病が死との関連で把握されて、個人の身体に体现される時を待たなければならなかった。

病が自然を否定する否定形の存在であることすなわち病が肯定的な実体的存在でないことの意味は、現代の日本語と英語の癌についての表現方法の違いの中に見て取ることができるであろう。すなわち日本語での「私は胃癌になった」という言い方は、その英語の対応表現である”I have a stomach cancer.”とは、心理的には全く異なる。つまり「なる」と「所有」の違いがもつ心理的な影響力には大きな差がある。「癌になってしまった」私が癌と対峙して、癌と戦うことは、癌の所有を非所有にしてしまうことよりもはるかに心理的に付加の大きいことであろう。このような日本語のいわば染色的な表現は、病が自然を否定する否定形の存在であるという病気観に対応しており、英語の所有形の表現は病が肯定的な実体的存在としての病気観に対応しているととらえることができる。

3-3. ペストの2原因

パレによると、ペストの「一般的かつ自然の原因は2つである。」すなわち「感染して腐敗した空気とわれわれの身体において悪化しペストとペスト化された空気を取り込めるように準備している体液の変化である。」（全集 III p. 356）このようにパレは、ペストという病を、われわれの体内に取り込まれる空氣的要因（ペスト毒）とそれを受け取るわれわれの体側の準備状態・素因（体液）の相互作用においてとらえている。そしてパレはこの論理の根拠を求めて古代の権威に訪ねるとともに、それを自らの経験の実証性にも基づかせている。すなわち「このことは、われわれの体の体液は腐敗して毒性を獲得すると言うガレノスによって根拠づけられている。」と述べると共に「ペスト化された空気を吸い込んだ全員が必ずしもペストに罹るわけではない。なぜならペストに罹るのは何らかの準備と素因があ

るときだけであるから。」(全集 III p. 359) とも述べている。

現代の病気学や細菌学に馴染んだ者の眼からすると、パレによるペストの原因の把握の仕方は、単純でありかつ不正確ではあるが、見方を変えてみると、そこには現代の西洋医学が喪失した個人の体質を重視した医療の特徴をうかがい知ることができる。十分な実証的研究方法がまだ存在しない当時であって、知覚されにくい空気要因(ペスト毒)についての研究よりも自らの経験に基づいて実証的に研究できる体側の準備状態・素因(体液)の側面が、医療の中心になったことは想像に難くない。実際、パレは「空気的全構成要素の中で、暑くて湿った構成要素が極めて危険である。なぜならそのような資質は腐敗の原因であるからである。」(全集 III p. 359) と述べるものの、それ以上分析的に追究することは不可能であったに違いない。これに対して体側の準備状態・素因としての「体液」は、古代ギリシャのヒポクラテス以来の西洋医療の伝統的枠組みであり、この枠組みに基づいてパレは詳細な治療理論を展開した。

4. パレによるペストの治療理論

4-1. ペストの最善の治療法

ペストの治療の効果が不確かであった当時においてペストの予防は治療よりも重要であった。実際、パレはペストの予防について次のように言う、「さてこれから、予防は治癒に先行するだけにペストからどのように自分を予防するかを言う必要がある。」「さて真実のところ私が全ての古代人と共に教えることができる最上の治療法は、感染の場所から即座にかつ遠くへ逃げて、健康な空気のところへ退去して、可能ならば十分に遅くそこに戻ることである。」そして、それが不可能な場合には、「一般的に二つのことを遵守する必要がある。ひとつ目は、空気の感染に抵抗できるように体を強化することである。ふたつ目は、感染した空気とその毒をわれわれに刻印するのに十分に強くしないようにする方策である。それは暑過ぎる場合には冷たい物で対処するなどのように、反対の資質によって空気を是正することによってできる。」そして、ここで述べられている「空気の感染に抵抗できるように体を強化する」ことは、体液をよい状態に保つことであり、それは体液の腐敗を防ぐことであった。

4-2. 体液腐敗の原因

パレは、ペスト毒を受け入れる体側の準備状態・素因(体液)を空気要因の場合と同様に、腐敗に求めている。「さてこれからわれわれの身体の体液の腐敗の原因を宣言する必要がある。ところでわれわれの体液は、量の過剰あるいは閉塞、体質偏向、主に悪しき生き方(*la mauvaise maniere de vivre*)によって起きる素材の劣悪さによって悪化し腐敗する。」とパレは言う。ここで、「悪しき生き方によって起きる素材の劣悪さ」とは、「腐敗したぶどう酒、悪くて腐敗した水、悪い肉、腐敗した種子、野生の草や果実、その他の変化して慣れの無い食物」である。これらの物を飲食することによって「食物は体液の閉塞と腐敗を産み出して、そこからペストを準備する」症状(リンパ節腫脹・潰瘍、高熱など)を産み出す(全集 III p. 360)。そしてこれらの症状を、「恐怖、驚愕、憤怒などのような精神と体液の攪乱が大いに助長する。なぜならこれらの物は身体の経済と全ての習慣を変化させるからである。」このように精神、心理状態と体液の交感作用が存在することの指摘がなされている。

4-3. ペスト毒に抵抗できる体をつくる治療法

パレによると、ペスト毒に抵抗できる体は、よい生活療法(*bon regime*)、排泄法(*purgation*)、必要ならば瀉血法(*saignée*)のように適切な治療法によってよい体液を産み出すことのできるようになった。そしてよい生活療法として、「多様な肉、熱すぎ湿り過ぎた肉、主に容易に腐敗する肉を避け、菓子・ケーキ類を食べないこと、味わい過ぎないことも必要であり、食欲を保ってテーブルを離れるべきである。」とパレは言う。また、中庸あるいは程々が大事であるとも言う。というのは「同様に肉は良い肉汁をもち、消化が容易であるべきである。なぜなら季節と場所の中庸を保つ食物の摂取は、健康の元であり、結局はペストを予防するところの良い体液を産み出す。」からであった。排泄法と瀉血法とは、体液量の過剰あるいは閉塞を改善することを想定して実施されていた。体液の状態は、色調によって判断されていた。すなわち「全身の色がいつもよりも黄色いときは、身体が胆汁(*cholere*)に満ちていることを示している。もしもそれがより鉛色で黒いと、黒胆汁(*melancholie*)に満ちており、もしもそれがより白いと、痰(*pituite ou phlegme*)に満ちており、もしそれが赤くて静脈が強く腫れているな

らば、血液 (sang) で満ちている。また膿疱はそれを引き起こした体液の色を保持しているように思われる。嘔吐物、糞便、尿のような排泄物についても同様である。」(全集 III p. 386)

その他のよい生活療法として、程々の運動をすること、通便が良いこと、そして心臓を強心作用のある物によって強化することも必要であるとパレは考えていた。実際に、「また朝、夕食前の夕方にペスト化された空気の懸念のない場所で程々の運動をすることも必要である。同様に人工的あるいは自然に便通が良いことも必要である。また心臓とその他と高尚な部分を貼布剤、軟膏、膏薬、水薬、丸薬、散剤、錠剤、麻薬、香料、その他後述するものなどの強心作用のある物によって強化することも必要である。」と述べている。

4-4. 自然を衰弱させるペストに対する食事療法

パレは、ペストほど自然(という体)を衰弱させる病気は存在しないことに注目していた。そのためには、病人の個人的特質に応じて個別化された食事のアドバイスが経験的に有効であることを記載している。すなわちパレは、「病人には、衰弱によって外部に排除された毒が再び内部に引き入れられないために、必要と見るところに従って、習慣、年齢、病期、地域、とりわけ病人の力に配慮して、食事を少量で頻回に与える必要がある。」と述べている。

「有毒の腐敗は生命精神と自然精神を腐敗させ、変化させ、狂わせるが、これらはすでに警告したように飲食によってしばしば回復させることができる。」しかしながら、パレは程々が大切であることを付け加えることを忘れなかった。パレは言う、「しかしながら食べ過ぎには注意が必要であり、病人に余計な素材を課すべきではない。それゆえにここでは中庸を保つべきである (on tiendra mediocreté.)」(全集 III p. 400)

現代人が栄養学の知識に接するときの問題点のひとつは、trade-off の知識が欠如している場合が少なくないことである。すなわち「体によいものは、摂れば摂るほど良い」という直線的な加善効果を前提として持っていることである。これは「塵も積もれば山となる」式の金銭貯蓄型とも言うべき思考方法である。このように現代人はパレから学ぶべきことが少なくない。

5. パレとヒューマニズム

5-1. ペスト患者を手当てした医師への迫害に対する政府の対策の必要性の訴え

パレは、ペスト患者を治療するために市民によって強制と暴力でもって雇われた医師が、治療後に市民から刻印を押されて迫害されるという事態の改善策を政府に提言した。パレは述べる、「私は、もし病人に施薬するために命じられた者たちがこのような強制力と暴力でもってそこに雇われるならば、どのように哀れな病人たちが十分に治療され得るかはあなた方の判断に任せる。そして災難が去って担保が破棄されて、哀れな内科医、外科医、薬物師、床屋外科医はペスト患者に包帯を巻いたという刻印を押され、みんながその後は彼らをペストそのもののように避けて、彼らはもはや彼らの学術を行うように要求されることはない。」「そして彼らの仲間はその後彼らが命乞いをしているのも同然状態にあるのを見て、ペストよりも10万倍恐れるこのような赤貧の状態に落ち入るのではないかと疑って彼らのところに行こうとはしない。なぜなら自分の貧しい生活を助けるための金銭を持たないことは人間にとって大規模のペストであるからである。」このように述べた後で、パレは次のように政府の役人に訴える、「それゆえに私は行政官のみならずペスト患者を助けるために経験豊かな人々を(すでに申しあげたように)選んで、彼らに必要な期間だけでなく一生に渡ってしかるべき手当を支給することをお願いする。それゆえにいかなるトランペットも必要ではなく、逆に彼らと彼らの市民とに仕えることが必要である。」(全集 III pp. 378-379) このように、ペスト患者を治療する医師は、常に感染による死の危険に曝されていただけでなく、たとえ生還したとしても、市民から刻印を押されて医業を営めなくなっていたという実態がうかがわれる。

5-2. ペスト患者を見る医師の心得

感染による死の危険と対峙することになるペスト患者を治療する医師(外科医)の心得についてパレは信念に満ちた言葉を残している。「まず第一に彼らは手術を行うために神から呼ばれてこの職業についていることを考慮する必要がある。それゆえにいかなる恐れも持たず、神が気に入る時に神はわれわれを保持しそしてかくの如く生命を奪うという固い信念を持って正真正銘の勇気からそこに行くべきで

ある。」この毅然とした言葉に続けてパレは次のように言うのを忘れなかった。「とは言うものの（前述したように）予防法を無視し軽視してはいけない。さもないと神は人間の善のために全てのことを為して、われわれにこれらを与え給もうたことを鑑みると、われわれは忘恩にて非難されるであろう。」（全集 III P. 379）

このように述べたパレ自身も、ペスト患者の枕元に行って治療をしていたことが記載されている。すなわち、「（ペストの）危険の例としてここで以下のことを申し立てる。すなわち感染者の所に通っていたことがあったが、右鼠径部リンパ節炎と腹部の2つの大きな炭疽を持つある感染者に一度包帯をしに行くことがあった。彼の近くに到着して、私は彼を覆うシートと毛布を取り上げたところ、彼の体の多量の汗と彼のリンパ節炎と炭疽の泥の流出の腐敗した蒸気に由来する強い悪臭が私を捕らえた。そしてこの蒸気を飲まされた時に私は心臓の欠陥があるがいかなる痛みもなく失神する人のように死んだように即座に地面に倒れた。心臓の不良はなかったことは唯一の動物能力が傷害された印である。その後すぐに起き上がったが、家が逆さまに回転しているように思われ、病人が寝ているベッドの柱の一本に掴まらざるを得なかった。さもないと私はもう一度倒れたであろう。ほどなく精神を取り戻してから、私は鼻から出血するほど激しく10ないしは12回くしゃみをした。私の見解によると（よりよい判断は別として）、それがペストの蒸気が私に何の刻印をも記さなかった原因である。ところで魂の道具である私の全感覚と主に動物能力は一瞬衰弱したことを鑑みると、私の脳の排除能の力がなかったならば、死が続発しなかったかどうかは読者の判断にゆだねる。」（全集 III pp. 380-381）

5-3. 終末期の心得

パレは、助かる見込みがないと判断されたペスト患者にどのような医療をしたのだろうか。いや、そもそもパレはそのような患者に医療行為をしたのだろうか。なぜなら、医学の父と呼ばれるヒポクラテスは終末期の患者を診なかったと思われるからである。なぜなら、以下の記載があるからである。「まず、私が考えるところの医学とは何かを定義しよう。一般的に言うと、それは病人の苦悩を取り除くことであり、彼らの病気の猛威を緩和することであり、病気によって征服されてしまった症例においては、医学 the art of medicine は無力であることを認

識する故にそのような病人を診ることを拒否する。」¹²⁾ (Hippocrates: THE ART, III)

パレは、ペスト患者の瀉血法をするか否かについて以下のように記載している：「これらの徴候があれば瀉血はするべきではなく、病人には強心作用のある物を与え、彼らを神に推薦すべきである。しかしながら病人が死のあらゆる徴候を持っていても、私は哀れな病人を放っておかないで見捨てないで、いつも学術 (l'art) が命じることをするよう努力することを外科医にお願いする。なぜなら自然は内科医や外科医の見解に反して驚異的なことを時には為すからである。」（全集 III p. 385）ここにおいて、パレとヒポクラテス医学の決定的な相違を見出すように思われる。ヒポクラテスは、終末期において学術が無力であることを認識する故に診ることを拒否した。一方、診ることを拒否しなかったパレは、奇跡とも言うべきことが終末期の患者に起き得ることを経験していたからであった。ここには、また古代ギリシャのヒポクラテスの「人間への愛」とパレのキリスト者の愛の違いなのかもしれない。ヒポクラテスが、「人への愛の存するところには、またいつも学術 (テクネー) への愛がある。」と言うとき、現代の医師がその医療観から漏れる人々への愛を持つならばそれは学術 (テクネー) への愛とは根本的に異なる愛になるのではなからうか。¹³⁾

5-4. 若い外科医のための終末期の教え

パレは、終末期のペスト患者に医療行為を施しただけでなく、司祭その他の聖職者がいない場面においては、死に逝く患者のためにこころのケアを行う方法を外科医に語っている。パレは言う、「著者は、時にはかわいそうなペスト患者の死に際して司祭やその他の教会関係者が誰もいない場面に遭遇する若い外科医のためにこの些細な説論を為した。私は、国王シャルルがリヨンにいた時に、死者の絶え間ない間に、ペスト患者を療養するためにひとりの外科医が療養所に閉じ込められて、彼らの死の間際において彼らを慰める者の手助けがない状態にあることを目撃した。上記の外科医は、この些細な説論によって教えられていたので、自分を越えた偉大な司祭の必要性に仕えることができた。私の天職の分を越えるつもりはなく、ただ死の間際にあるかわいそうなペスト患者を手助けすることを欲する。」パレの方法は、以下の言葉を死に逝くペスト患者に語ることであった。

死は富者の恐れ、
貧者の望み、
賢者の喜び、
悪人の恐怖、
悲慘一切の終焉、
そして永遠の生の開始、
選ばれた者には至福、
そして見捨てられた者には不幸なり。

(全集 III p. 464)

ここでは臨終のペスト患者に対する医師(外科医)によるスピリチュアル・ケアが為されていた事実をうかがい知ることができる。パレが外科医の天職の分を十分に自覚していたことを鑑みると、これは当時の人々にとって医師は、聖人、魔法使いとの区別が十分についている存在ではなかった⁹⁾ことを単に物語るものと解釈すべきことではないであろう。むしろ、パレにおける患者—外科医関係の姿、さらにはパレにおける個人の存在の在り方すなわち関係性における個人の存在を端的に示す記録であろう。ここにおいても、多様で異質な要素と個人との関係を崩壊させないで流動性をもったまま統合することを特徴とした生活療法によるヒポクラテス医学の精神¹⁴⁾が、パレにおいて体现されているように思われる。つまりパレも時機(カイロス)を大切に時を考えることができていたのだという思いに至る。そして、古代ギリシャ語の *diaita* から生活療法という意味を結果的に失って来た 17 世紀以降の西洋社会は、カイロスとクロノスの比重がそれ以前の社会とは丁度逆転した社会なのかもしれない。

パレによるペスト患者の臨終における慰めの論理は、有限な肉体は悲慘であるが、永遠の魂は幸福であるという楽観主義である。パレは言う、「神が死によって彼の永遠の至福の王国を相続するためにわれわれを彼に導く使者をわれわれに派遣するときには、われわれは強い理由によって喜ぶべきである。交換 (*l'eschange*) がこのようであることを鑑みて、われわれは慰めの素材を持っており、死はわれわれにとって幸福の使者であり、彼はわれわれをこの世から天国へ、悲慘なこの生から永遠の生へ、不幸から至福へ、鬱屈から歓喜へ、悲慘から繁栄へ移行させ、われわれをおおいに慰め、嘆きの機会を取り除く。」(全集 III p. 463)ここでは、永遠の魂は幸福であるという西洋精神の伝統に基づいた精神身体二元論の利益を読み取ることができる。それと共に、永遠の魂は幸福であるという感得は、西洋の伝統的

文化という枠組みであるということにも気付かされる。

6. パレの医療の考察

6-1. 外科適用の指標

パレによると「適用の指標 (*indication*) とは、外科医の手に自らをゆだねる患者の保守、予防、治療のために外科医を案内し指導する何らかの意図に到達するための確実な指揮ないしは方針である。」(全集 I p. 92)そして外科適用の指標は、「自然物 (*choses naturelles*)」、「非自然物 (*choses non naturelles*)」、「対自然物 (*choses contre nature*)」の三者から引き出される。この三者の分類の中に、パレの個人主義的な生活療法学についての獲得的アートの特質があると思われる。

「自然物」とは、「類似物によって保守されるべきことを指示し教える」物であり、その「類似物のあるものは以下のものから獲得される」、すなわち、「病人の力と特質」、「体質」、「体格」、「病の部分の自然の性質」、「年齢」、「性」、「季節」、「地域」、「病期」、「生き方 (*la maniere de viure*)」である。「自然物」とは、体の属性であるが、それが「病人の力と特質」、「体質」、「体格」などのように体自体に直接属するものと、「年齢」、「性」、「季節」、「地域」、「病期」、「生き方 (*la maniere de viure*)」のように直接体とは結びつかないものを含んでいるという特徴が認められる。これらの「自然物」のうちで現代の医学や栄養学が明確に考慮しているのは「年齢」だけであることを鑑みるならば、このパレの「自然物」が実に多様な要素において病人を考慮していた結果であることが理解される。そして、現代の日本の臨床医学がようやく考慮し出した「自然物」が「性」であることを思うならば、「性差医学」の誕生が伝統的な西洋医学の枠組みの最前線における動向であることが理解される。

「非自然物は、自然と対自然物の類似物を指示するが、それらのうちわれわれはガレノスに従って、空気だけを考慮する。」とパレは述べている。この定義から、「非自然物」は、体に対する環境要因を意味することが理解される。以下に述べるように、空気以外の「非自然物」は全て「生活療法 (*diete*)」との関連で取り上げられている。

「対自然物」は、パレによると「病、病因、症状のように排除されることを指示し要求する」ものである。「対自然物」はあくまでも身体という自然と

の関連で把握されたものであり、Michel Foucault が言うように自然を否定する否定形の存在以上のものではなかった。⁴⁾

6-2. 生活療法

パレによると、「生活療法 (diète) は、飲食だけでなく医師が非自然 (non-nature) と名付けているところの6つの事の使用に際して遵守すべき秩序であり規則である。」この6つの事とは、「空気」、「飲みのも・食べ物」、「睡眠・覚醒」、「運動・休息」、「こころの情緒と情念における中庸」、「排泄と保持、あるいは満腹と飢餓」である。(全集 III p. 84) このようにパレの医療の枠組みは、個人の属性としての「自然物」を中心としていることに加えて「非自然物」を対象とした個人の「生活療法」にも焦点を結んでいるという特徴がうかがわれる。

6-3. 薬物療法、生活療法、外科療法の位置づけ

パレによると「薬 (medicament) は、ひとつあるいはそれ以上の資質において自然 (nature) を変更し得る物であり、自然の物体に変換されない」ものである。これに対して「食物 (aliment) は自然を全く変更しないかほとんど変更しないで、われわれの体の物質に変換される」ものと定義されている。(全集 III p. 520) この薬と食物の定義は、現代の西洋医学や栄養学にも当てはまる定義である。元来豊富であったと考えられる食物とは対照的に、副作用が少なく実質的に使用された薬の種類はパレの当時まではほぼ排泄促進剤 (下剤、催吐剤) に限定されていたことが想像される。しかしながら、パレはまた古代の医薬についての論文に引き続いてそれをいわば補完する現代の医薬として蒸溜物 (distillations) についての論文を書いている。この事実より、当時は次第に蒸留による化学的純化の技術が進歩してきたことがうかがわれる。(全集 III p. 614)

パレの記載によると、古代ギリシャのヒポクラテスの時代以来、治療法における薬物療法の地位は生活療法や外科療法の地位に比べて低かった。すなわち、古代ギリシャのヒポクラテスを含む「アスクレピウス派の医師達は薬は胃を害するものとして拒絶した。」薬物療法 (la pharmacie) に関しては、「ヘロフィルスは神と見做されているアポロンの手によって発明されたと言っている。」ことを記載している。生活療法 (la diététique) に関しては、「プ

リヌスは毎日世界で最も貧しい者でさえその食事において病気の真の癒しを摂取していることを断言している。」ことをパレは記載している。「さらに、医学 (la Médecine) について書いた最大の専門家達は、生活療法 (régime) による病気の治癒は他の方法によってもたらされた治癒よりも優ると言い、良い生き方 (bonne manière de vivre) による病気からの開放は、摂取が辛く我慢しづらくその作用が辛い薬物 (médicaments) による脱出よりもより当を得ているとさえ言っている。このことがアスクレピウス派の医師をして薬物を胃を害するものとして却下する機会となった。」このように、古代ギリシャ以来の治療においては、生活療法 (よい生き方) が薬物療法よりもより評価されてきたことが理解される。

外科医であるパレはまた、次のように記載している：「しかしながらケルススによると、手術 (la Chirurgie) よりも推奨されるものはない。薬物 (médicaments) と生活療法 (diète) によってもたらされる病の創出において、自然 (la Nature) は偉大な力を持っており、時には役立つことがそれ以外の場合には何の役にも立たないことを鑑みると、われわれにもたらされる健康は自然の恵みによるものなのかあるいは薬物や生活療法 (régime) によるものかはこのように疑わしいものである。」パレの記載では、生活療法は diète, régime, la bonne manière de vivre という言葉が用いられている¹⁴⁾。(全集 I p. 22-23)

7. アンブロワーズ・パレと現代

「私は患者に包帯を巻き、神が彼を癒したもう (Je le pansay et Dieu le guarist.)」という言葉がパレの言葉として現代に伝わっている。パレ全集の編者である J-F Malgaigne はその 351 ページに渡る膨大な序論の中で、その言葉は、「神への信仰、神への熱い期待に加えて病人への深い慈悲を表す」ものであると述べている。(全集 I 序文 CCXCVI p. 296) そして、パレは決して「私は患者に包帯を巻いた、神が彼を癒したもうように! (Je t'ai pansé, Dieu te guérisse!)」とは言わなかったことに注意を喚起している。パレは、「包帯を巻いた後、治癒に有利に働くあらゆる手当をして彼を見守り、そして手当が成功した後で、慎み深く「神が彼を癒したもう。(Dieu le guarit)」と言ったのだと

説明している。」

パレが実際にマルゲーニュの言うような状況においてこの言葉を発したかどうかは定かではないが、このパレの言葉の源とも想定され得る記載をパレは残している (全集 III p. 419)。すなわち、「時々血液は、温かく、繊細で、胆汁性であるが故に、また自然が分水嶺を為すことを欲する故に、自然に流れ出る。このことを私は国王 (陛下はバイヨンヌに居られた) の騎士団の騎士であるド・フォンテーヌ氏に訪れるのを目撃した。彼は持続性のペスト熱を持ち、身体各所に皮疹を伴っており、2日間絶え間なく鼻出血を起こしていた。そしてこの出血によって大量の発汗と共に熱は治まった。そして間もなく皮疹が化膿して、私による包帯法がなされ、神の恩寵によって癒された (et [lequel] fut par moy pensé, et par la grace de Dieu guari)。このような場合には出血はするにまかせるべきである。しかしながら自然 (Nature) が乱され過量の出血によって力が衰弱し過ぎるならば、止血がなされるべきである。」この文脈に基づいて考えるときには、パレの「私は患者に包帯を巻き、神が彼を癒したもう。」という言葉の意味は、自然 (Nature) との関係で吟味される必要がある。すなわち、患者は偉大な力を持っている自然、言い換えると自然治癒力によって癒されることへの言及ととらえることができる。少なくともパレの言う神は自然治癒力と相当重なっている概念であったことが読み取れるかもしれない。

上述したように、パレによると薬 (medicament) は、ひとつあるいはそれ以上の資質において自然 (nature) を変更し得る物であり、自然の物体に変換されないものであった。これに対して食物 (aliment) は自然を全く変更しないかほとんど変更しないで、われわれの体の物質に変換されるものと定義されていた。(全集 III p. 520) 言い換えると、薬とは自然あるいは自然治癒力を変更する力を持つものであり、食物は自然あるいは自然治癒力に同化されるものである。このように理解するとき、古代ギリシャのヒポクラテスからアンブロワーズ・パレに至る治療法における生活療法の伝統は、食物は自然あるいは自然治癒力の全体性 (wholeness そしてその意味での health) の回復を目的とする伝統であったことが理解される。この意味では、漢方薬の考え方と同じである。すなわち「医食同源」という言葉が示すように、医すなわち漢方薬はパレの定義の食物であって薬ではないのである。また薬物療法 (la pharmacie) の古代ギリシャ語の語源の pharmakon は毒をも意味したことを考慮するとき、生活療法と薬物療法の自然への作用の質的違いがよりいっそう

明らかになる。

17世紀にその出発点を有する現代の医学および栄養学は、古代ギリシャのヒポクラテスからアンブロワーズ・パレに至る治療法における生活療法の伝統の脱却によって構築されてきた科学的方法論を基盤とした科学の学野である。これらの科学分野が見失ったものは、自然あるいは自然治癒力の全体性 (wholeness そしてその意味での health) の回復を目的としたアートである。そしてこのアートと共にその基盤となっていた「関係性に基づいた個人」という視点を見失ってしまったのであろう。

7. 要約

アンブロワーズ・パレの外科学の特徴を検証することが本研究の目的であった。近代外科学の創設者と言われるアンブロワーズ・パレは、科学としての医学および栄養学が成立する前夜の16世紀フランスに生きた実証的な観察眼と共に深い人間愛を持ったルネッサンスのヒューマニストであった。現代の医科学と較べると、アンブロワーズ・パレの医学はいくつの特徴を持っていることが判明した。すなわちまず第一に、彼の外科療法は、生活療法と薬物療法とが互いに補い合う治療法であった。第二番目には、彼の医療は、病気の種類よりも患者の個人的特質に応じて個別化された医療であった。第三番目には、彼の治療法は生活療法によって体の自然治癒力の足りない部分を補って全体性を回復することを目的とした獲得されたアートであった。現代の生活療法すなわち良い生き方の樹立のためには、このアンブロワーズ・パレの治療法の視点が重要であらう。

引用・参考文献

1. 藤井義博. 食事療法の歴史的意味—序説—. 藤女子大学紀要 No. 40, Ser II: 7-12, 2002.
2. Companion encyclopedia of the history of medicine. Ed. by W. F. Bynum and R. Porte, vol. 2, p.949, Routledge, London, 1993.
3. Ambroise Paré OEVRES COMPLÈTES, 3 tomes. SLATKINE REPRINTS. Genève, 1970.
4. Michel Foucault. Naissance de la clinique: Une archéologie du regard médical. Presses Universitaires de France, Paris, 1972.
5. 渡辺一夫 フランス・ルネッサンスの人々 白水社、東京、1964.

6. A Croix et J Quéniart. Histoire culturelle de la France.
2. De la Renaissance à l'aube des lumières. p.102,
Editions du Seuil, Paris, 1997.
7. マルク・ブロック著、井上泰男、渡邊昌美訳 王
の奇跡と王権の超自然的性格に関する研究／特にフ
ランスとイギリスの場合 pp. 378-379 刀水書房、
東京、1998年10月
8. P ガクソット 内海利朗訳 フランス人の歴
史2 pp. 359-360 みすず書房、東京、1973年5月
9. ジョルジュ・デュビイ、ロベール・マンドルー
前川貞次郎、島田尚一訳 フランス文化史 II
P. 103 人文書院、東京、1969年4月
10. Eisenberg DM, Kessler RC, Foster C, Horlock FE,
Calkins DR, Delbanco TL: Unconventional medicine in
the United States: prevalence, costs, and pattern of use.
N Engl J Med, 328: 246-282, 1993
11. Internal Medicine 3rd ed. ed. by J. H. Stein,
pp1503-1504, Little Brown, Boston, 1990.
12. Hippocrates: The Art. III, Hippocrates IV, with an
English translation by W. H. S. Jones. PP. 192 - 193,
Loeb Classical Library, Heinemann, London, 1931.
13. 藤井義博 死をめぐる人間関係と現代 ター
ミナルケアへの提言 編者:方波見康雄、近藤文衛、
形浦昭克 p. 164-p. 175 金原出版、東京、1995年
14. 藤井義博 ヒッポクラテス医学における生活
法—栄養療法の知的枠組みについての研究 I—藤女
子大学紀要 第41号(第II部) 69-75, 2003年12
月